

## 手でみるプロジェクト 2018

### —触察で鑑賞できる展覧会の企画と運営—

<研究代表者>

古屋 祥子 山梨県立大学 人間福祉学部

<共同研究者>

武末 裕子 山梨大学 教育学部

芝田 典子 彫刻家

1、はじめに .....	3
2、プロジェクトの目的と背景.....	3
3、今年度の取り組み.....	4
3-1 展覧会実施概要 .....	4
3-2 展示作品紹介 .....	5
・山梨ゆかりの彫刻家の作品 .....	6
・山梨大学学生作品.....	6
・資料展示 .....	7
・盲学校ワークショップ児童作品.....	8
3-3 展覧会準備.....	9
3-4 盲学校ワークショップ.....	9
4、考察 .....	11
5、おわりに .....	12
巻末資料 .....	13
《謝辞》 .....	14



具体的には、大きく分けて以下の3つの活動内容に分かれる。

①触察による美術鑑賞において先駆的な海外の取り組みを紹介する講演会

②視覚に障がいのある人もない人も楽しめる「手でみる展覧会」

③盲学校との連携ワークショップ

本研究は主に、この中の②「手でみる展覧会」について報告するものであり、これに関連して部分的に③についても触れていく。

展覧会開催においては、あらゆる人に深い鑑賞の場を提供することを目的に、触察が可能な作品の展示と共に、資料紹介を行う。また、制作者によるギャラリー・トークの場を設け、地域の方々が美術に親しんだり、理解を深めたりする機会とする。さらに、盲学校における継続的なワークショップの成果を公開することを企画し、視覚障がい者や子どもといったマイノリティに対する理解を深める契機としたい。加えて、一連の活動に学生が主体的に関わることができるようにし、実践的な学びの機会とする。

### 3、今年度の取り組み

#### 3-1 展覧会実施概要

展覧会名：「手でみる展覧会」

開催日時：2018年12月14日、15日、16日9:00~17:00

会場：山梨県立美術館 本館2Fロビー

共催：国立大学法人山梨大学 教育学部、公立大学法人山梨県立大学人間福祉学部、山梨県立美術館

協力：オメロ美術館（イタリア）、アンテロス美術館（イタリア）、山梨県立盲学校、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、山梨県立美術館協力会、社会福祉法人山梨ライトハウス

展覧会会場運営：山梨大学学生（市川文弥、里吉真緒、遠藤和香）・山梨県立大学学生（種市純美、山岸美波、大森桜、海野菜々子 他）・山梨県立美術館（高野早代子・百瀬淳一）

広報デザイン：ホッタ チカ（デザインカロ）

イタリア語翻訳：Franchesca Reare

資料協力：ロレッタ・セッキ（アンテロス美術館）、パオロ・グアランディ（彫刻家）、大内進（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 特任研究員）

展覧会コーディネーター：古屋祥子（山梨県立大学准教授）

事業コーディネーター：武末裕子（山梨大学准教授）

視覚に障がいのある方を含む多くの方々に来場いただき、総来場者数は636名であった。出品作品は、手で触りながら鑑賞できる彫刻作品を中心に、山梨ゆかりの彫刻家

や山梨大学の学生作品 8 点、盲学校の児童が制作した作品 21 点、資料展示 3 点に加え、映像資料 3 点であった。特に 12 月 15 日（土）11：30～12：00 のギャラリートークには、関係者や専門家が多く集まり、開放的な空間の中で触察による鑑賞が行われ、制作者と来場者との交流が深められた。



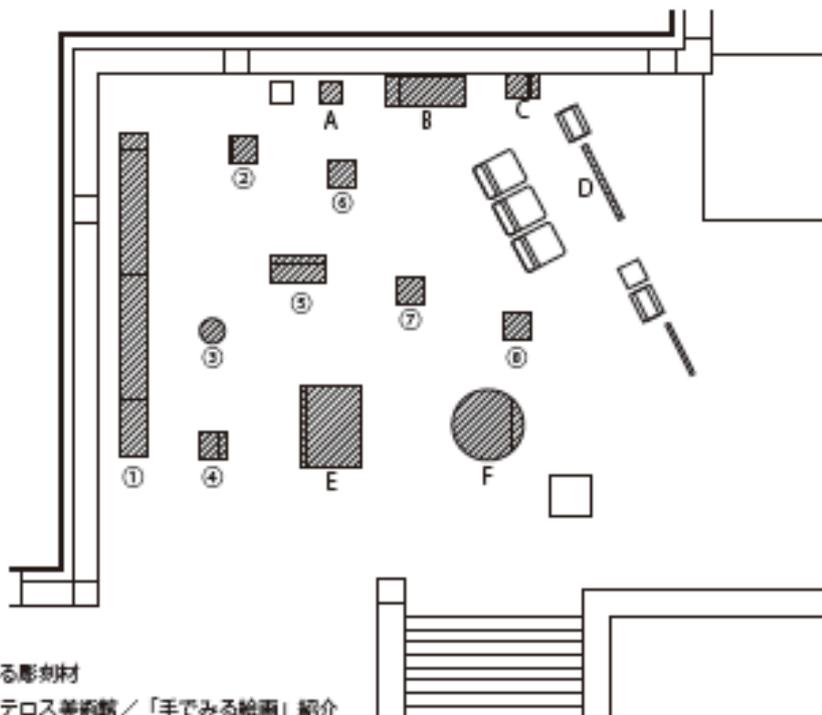
会場の様子



ギャラリー・トークの様子

### 3-2 展示作品介绍

#### 手でみるプロジェクト 2018 会場配置図（山梨県立美術館 本館 2F ロビー）



- A. 触れる彫刻材
- B. アンテロス美術館／「手でみる絵画」紹介
- C. オメロ美術館の紹介パネル
- D. 映像放映「アンテロス美術館の魅力」「オメロ美術館の魅力」「県立盲学校連携授業の様子」
- E. 盲学校児童の創作楽器展示（リユース素材の活用）
- F. 盲学校児童の創作楽器展示（陶）

・山梨ゆかりの彫刻家の作品



① 賛助出品 《ミレー“晩鐘”150周年記念へのオマージュ》

三木 俊治

山梨県立美術館収蔵作品

アルミニウム・ステンレススティール

H50×W600×D128cm



② 《昇》

芝田 典子

大理石

H60×W38×D30cm



③ 《現れ出るもの》

鹿山 卓耶

楠

H110×W35×D45cm



④ 《森へ》

武末 裕子

ブロンズ、陶、ガラス、大理石

H60×W40×D40cm



⑤ 《ミロとフレロ》

石川 智弥・古屋 祥子

樹脂、石膏等

H150×W100×D50cm

・山梨大学学生作品



⑥ 《想》

里吉 真緒

テラコッタ

H30×W39×D14cm



⑦ 《吹く人》

遠藤 和香

テラコッタ

H40×W32×D30cm



⑧ 《ウミガメ》

市川 郁弥

樟

H16×W36×D37cm

・資料展示



A 触れる彫刻材

「触れる彫刻材」のコーナーでは、彫刻材として使われることの多い6種類の素材の触感や重さの違いを来場者に体験してえるよう、同じ体積の同じ形で比較できるサンプルパーツを用意した。



B アンテロス美術館/「手でみる絵画」の紹介

レリーフ資料制作：パオロ・グアランディ氏

資料貸出：アンテロス美術館日本分館「手と目でみる教材ライブラリー」より借用

触察による美術鑑賞法について先駆的な取り組みを重ねるイタリア・ボローニャのアンテロス美術館を紹介するコーナーを設けた。H29年度に行った「手でみるプロジェクト2017」における講演会とレリーフ制作実演の様子を部分的に紹介した。



D 映像資料放映

以下の3つの映像資料を会場で常時放映した。

- ・オメロ美術館の魅力
- ・アンテロス美術館の魅力
- ・盲学校連携ワークショップの様子



・盲学校ワークショップ児童作品



E リユース素材を活用して作られた楽器



F 陶でできた、マラカスやギロなどの楽器

平成 30 年 5 月~12 月、山梨県立盲学校小学部児童 5 名が大学学生・教員や美術館職員とともに造形活動に取り組み、様々な素材を活用して制作した楽器作品を展示した。出来上がった作品だけではなく、ワークショップの様子を映像で紹介することで、その制作途中に生まれた発見や学びを同時に提示することができた。また、作品解説キャプションには写真入りで音の出し方を解説したり、点字テープを張り付けたりといった工夫をし、子どもや視覚障がい者を含むあらゆる人に情報が伝わる配慮をした。

作品に触りながら鑑賞をするということに慣れていない来場者が多い中、持ち上げたり叩いたりといったアクションをおこすことで音が生じる楽器の展示は、来場者の触ることへの抵抗感を和らげ、自然に手に取る、触れるという行為を誘導するのに効果的であった。



### 3-3 展覧会準備

この展覧会開催に向けての準備作業は以下のとおりに進められた。

実施実績	
4月	展覧会開催日決定。会場・盲学校等との打ち合わせ。
5月	盲学校におけるワークショップ。
6月	展示内容検討。
7月	出品作家決定。
8月	展示作品制作。
9月	チラシ制作。
10月	学生スタッフ・展示レイアウト決定。広報活動。
11月	展示に関わる物品の準備。当日運営スケジュール作成。映像作成。
12月	展覧会スタッフ事前研修実施。展覧会実施。アンケート作成・集計。
1月	映像・写真整理。
2月	報告書作成。

山梨大学の武末准教授のもとプロジェクト全体の運営が進められる中、県立大学は展覧会における企画運営を分担担当した。展示内容に盲学校との継続的なワークショップの成果を示すことを盛り込んだため、盲学校の教諭と連携する場面も多く、また展覧会の会場となる美術館の学芸員や出品作家、学生スタッフとも協働して、展示会場を作っていた。さらに、当日会場の案内を行う学生スタッフの育成のために行った社会福祉法人山梨ライトハウスでの事前研修、盲学校の授業見学、彫刻家との交流の場では、多くの学外者と関わることができ、相互理解の機会となった。



事前学習 :  
アイマスクを付けた人を誘導する様子

5月には決定していた会場が急きょ変更となり、計画の修正を迫られたが、分担者がそれぞれ協力して代案を出して遂行し、当初の計画通りの期間で展覧会を開催できた。盲学校連携ワークショップでも、取り組み期間が後ろ倒しになる傾向があったが、山梨大学学生や県立大学学生が積極的に参加したことで、多くの作品を制作することができた。

### 3-4 盲学校ワークショップ

山梨県立盲学校内で行われた盲学校連携ワークショップでは、対象となった小学部の5人の児童が音に関心があることから、音を感じるものをテーマとし、「楽器」を制作することとなった。山梨大学、山梨県立大学、山梨県立美術館、山梨県立盲学校による全5回の連携授業の内容は以下の通りである。

- ①2018年10月17日 楽器演奏による導入並びに粘土による楽器の制作
- ②2018年10月30日 リユース素材<sup>1</sup>を活用した楽器の制作
- ③2018年11月12日 粘土作品への釉薬掛け

<sup>1</sup>山梨県内企業から製品を作る過程で生じる端材等を美術造形活動に活用し、山梨県内の芸術教育の発展とともに、芸術活動を通じた学びの可能性を模索する山梨県立大学のリユース・アート・プロジェクトで集められた素材。

④2018年12月7日 制作楽器による演奏会並びに美術館見学の事前学習

⑤2018年12月14日 美術館での鑑賞

特に第2回目にあたるリユース素材を活用した授業実践においては、県立大学が企画の段階から中心となって取り組んだ。学生が主体的に指導案を作成し、授業運営が行えるようサポートした。作品を作ることにこだわりすぎず、児童が素材遊びや音を楽しむことに重点を置き、制作過程での児童の発見や学びを大切にしながら授業を進めた。

**リユース・アート・プロジェクト**  
Reuse Art Project

山梨県立大学リユース・アート・プロジェクトとは

県内企業から出される端材をアート素材（シーズ）として蘇らせ、芸術教育の素材を手に入れたいニーズとの架け橋を担うことにより、地域の芸術活動を活性化していく取り組みです。

山梨県内の芸術教育の発展とともに、芸術活動を通じた学びの可能性を模索し、教育や福祉現場に還元できる情報提供の場の構築を目的としています。

**本学の目指す“アート教育”**

地域の人々の創造性や表現力が活かされる場づくりを理念に、①本学学生への教育、②教育・福祉専門家の学びの支援、③芸術活動へのサポート、④地域活性化を目指した県内企業との協働を展開していきます。

「アート教育」  
子どもの創造性・表現力が活かされる場づくり



ワークショップ会場に持ち込んだ様々な素材

2014年から取り組まれている  
山梨県立大学リユース・アート・プロジェクトの取り組み概要



児童が好きな素材を選び、組み合わせて作ったオリジナルの楽器



第1回目、3回目に制作した陶によるマラカスなどの楽器

盲学校連携ワークショップでは、盲学校・大学・美術館がそれぞれの専門性を活かし協

働したことで、より実践的な研究事例となり、地域性を含んだケーススタディとしても貴重なものとなった。

#### 4、考察

《資料1》の来場者アンケートのコメントからも推察できるように、直接作品に触れながら制作者や学生スタッフと対話をするという開放的な空間づくりにより、鑑賞者の堅苦しい美術鑑賞の先入観を和らげる効果があったと考えられる。特に、美術のジャンルの中でも一見難しく考えられがちな彫刻の鑑賞に関して、県内公共施設において、地域の方々に親しみやすく能動的に取り組める美術鑑賞の場を提供することができたことは、成果として大きい。多くの来場者は、手で触りながら作品鑑賞をすることで初めて気付く視覚情報と触覚情報のギャップや、触覚情報の雄弁さに驚き、盲学校児童の作品においては、その存在感に親しみを覚えている様子であった。また、視覚障がい者の視点を疑似体験することで改めて社会福祉の充実の必要性に気が付く様子も見受けられた。このような発見は、大人と子ども、障がいの有無を超えたインクルーシブな社会のあり方を考えていく契機にもなったのではないだろうか。

また、視覚優位の美術鑑賞の現状において、触覚をキーワードに据えるという特殊性の高い企画には、専門家を含む多くの来場者からの関心を集め、《資料2》のように報道機関からの注目も高かった。このように社会に発信することができた理由としては、山梨大学を中心とした多くの団体との協働によって企画や運営が行われたことが大きい。研究・教育においても同様に、教員や講師、学生等の協力により、内容の向上の相乗効果が生じた。

作品制作における制作意欲の向上については、国内外で活躍する作家との協働による展覧会作りが大きく作用した。会場における制作者同士や来場者との交流においても、多くの意見交換がなされ、今後の作品制作に対する質や技術の向上に効果的であった。

参加した大学生に対する教育的効果については、《資料3》の学生の感想にも示されたように、大きな成果があった。今回のような他機関との密な関わりを通じたプロジェクトは、地域とのつながりを活用して地域の中で子どもたちを育んでいく実践経験となり、将来保育士や教師となる学生にとって、深い交流と多面的な学びの場となった。また、社会における福祉問題に対して美術分野がどんなアプローチができるのかを共に考え、実践する貴重な場ともなった。ひとりの教員、ひとつの学校機関だけでは難しいことでも、問題意識を共有する人間が協働することでパワーが生まれ、社会に対して発信



オメロ美術館館長グアランディさんによる  
触察鑑賞の場面

してくこともできるのだという体験は、問題意識を持つ必要性を学ぶとともに、他の専門家との連携や地域人材活用の効用と実践法の理解に繋がり、今後求められる保育・教育者の養成に大きな効果をもたらすのではないだろうか。

## 5、おわりに

今回の研究を通して実感したことは、触覚を通した美術鑑賞という取り組みにおける様々なシーンで生まれる「相互理解」の効果である。筆者も多くの関係者や協力者との関わりの中で、視野が広がったり理解が深まったりという経験を重ね、それまで自分にとって当たり前だったことに対し考え直すきっかけを得てきた。相手の立場や状況に対して無自覚ゆえに無関心になってしまうことへの警鐘として、社会的マイノリティへの理解は重要である。今後もあらゆる相手との相互理解の手段として、美術の可能性を探っていきたい。

## 巻末資料

### 《資料1》

#### 来場者の声 (来場者アンケートより感想を一部抜粋)

- 見るだけでいるのと触るのでは感じ方が全然違って面白いなと思った。
- とても楽しめた。
- さわること楽しめた。
- いっぱい作品をさわらせていただきました。見るだけとはちがい楽しかったです。
- 彫刻を触ったのは初めてだった。
- 美に「触れる」事も大きな美だと分かった。
- 自分とは違う見え方を持つ人の作品に触れることで、自身にも色々な気づきがあった。
- 視覚障がい者の視点に気づく窓口の第一歩になった。
- 説明していただけたので分かりやすかったです。
- さわってみて、想像しているところとちがうところがあった。
- 作家の人から作るときの話聞くことができた。
- いろんな材料で作られた作品が多くあり、材料の違いなどがよくわかりました。
- さわって分かった感触があった。
- 作品の解説もだし、自分とは違う世界があると感じた。

### 《資料2》

#### メディア報道実績

##### ◆ 「手でみる展覧会」テレビ広報

番組：NHK 甲府放送局 News かいドキ

放送日：平成30年10月17日(水) 放送時間：午後6時45分～6時50分

##### ◆ 「手でみるプロジェクト2018」ラジオ広報

番組：YBS ラジオ ラジオライトハウス

放送日：平成30年12月9日(日) 放送時間：午前7時45分～8時00分

平成30年12月16日(日) 放送時間：午前7時45分～8時00分

##### ◆ 「手でみるプロジェクト2018」新聞広報

山梨日日新聞 平成30年12月8日付

##### ◆ 「手でみるプロジェクト2018」新聞広報

山梨日日新聞 平成30年12月15日付

## 《資料 3》

### 学生の声

#### 児童との関わりの中で

山梨県立大学 人間福祉学部 人間形成学科 4年 種市純美

私は盲学校連携ワークショップに企画の段階から参加し、リユース素材を活用した授業実践においては、指導案を書き、中心となって取り組んだ。児童が自ら音を発見できる環境を作るために、どのような働きかけや配慮が必要か、盲学校の先生の助言を受けながら授業を進め、その中で気づいたことや課題から、障害児教育について考えを深めることができた。また、教師や児童に関わる大人は、自分の言葉が子どもたちの成長に大きく影響するという責任を持ちながら教育に携わっていく姿勢が重要であると学んだ。

今回のワークショップでは、大学生や大学の教員と一緒に小学部の児童全員で授業が行われ、普段の授業では接する機会が少ない人と多く関わりがあった。このような他学年や他機関との連携があることによって、他の児童と制作物を鑑賞し合ったり、いつも近くにいる教師以外の人とコミュニケーションをとりながら制作を進めたりすることを通じて、児童たちの他者と関わろうとする社会性を育むことにつながると感じた。また障害のある人と障害のない人が同じ活動を一緒にすることで、相互理解を深める場となっていた。

また、美術館という特別な場所に自分の作品が飾られ、それを見に行くという体験は、児童にとって、通常の図画工作とは違った特別なものとなったと感じた。自分の作品を多くの人に見てもらえる機会を設けることは、自分の表現が認められるという自己肯定感をもたらすと共に他者に伝える楽しさや、他者の表現を受け入れることにつながるのではないだろうか。そして、児童の作品を見た人にとって、子どもの表現や障害への理解が深まるきっかけになると思った。多様な人が集まる美術館は、子どもと大人、そして障害のある人、障害のない人の相互理解を深める場にもなりうると感じた。

今回、盲学校の現場の先生方の対応力や児童への丁寧な教育を見て、4月から保育士として働く上で、子ども一人ひとりを理解し、その子どもに合った保育、教育を提供する大切さを学ぶことができた。この活動で得た知識や経験を就職先で活かしていくとともに、主体的に障害のある人、障害のない人の相互理解を働きかけていきたい。

## 《謝辞》

今回の研究では、山梨県立盲学校の皆様をはじめ、山梨県立美術館他、多くの方々にご協力いただきました。ここに記して感謝の意を表します。